

季節風の彼方に

現代社

昭和 33 年 6 月 10 日 初版発行
昭和 33 年 7 月 1 日 四版発行

佐藤 鐵章



季節風の彼方に

発行所

株式会社

現代社

東京都新宿区南山伏町一番地

(振替東京 102740)

発行者 枝見静人

印刷者 藤本 鞏

藤本綜合印刷 鈴木製本

普及版 定価 180 円

乱丁，落丁はおとりかえいたします

彼方

佐藤鐵章



現代社

季節風の彼方に
目次

第一部

六

第二部

七

第三部

三

季節風の彼方に

第一部

第一章

時々、闇い天井から煤煙^{すすけ}の塊りがぼとつと落ちてきた。那村文江は、そのたびに、ちょっと目をあげて、その真暗い天井を仰ぎ、それからその視線を真直ぐ下におろした。そして炬燵の上に横たわっている百足の恰好の黒い塊りを眺めるのだったが、すぐもとの姿勢に還って、せせと作文のつづきを書きつづけるのであった。書きすめているうちに鼻の奥が妙にしゅんとなって目頭がうるんできたりした。こんな心の谷間の中に、時折うかんでくるのは幸田仁先生の顔であった。幸田先生の、沈んだ調子の講義の断片が耳にきこえてくると、はっとして息をのんだ。しかし、また別の幸田先生の顔がうかんでくると、急に背筋が縮むような寒さを覚えるのであった。何かこつんと石のように冷たく頑固な表情がそこにあった。その表情にぶつかると、文江は狼狽^{うろた}てて顔をしかめ、目ばかりを幾度かした。それからハッと我に還って部屋の隅の仄暗い一点をみつめて微かに頭を振った。幸田仁という教師が何も彼も複雑でさっぱり判らない存在に思われるのであった。作文の点数は、いつも八十九点なのであった。級中の誰もが九十点をつけて貰ったためしがない。一体どうしたというのであろう。幸田先生が一体何を自分達に要求しているのか分らなくなるのである。普断講義のときは沈痛な面持で、それがときにはナイーブな姿にみえることもあるのだが、どうかすると自分一人の世界だけに閉じ籠^{こも}って、まるで生徒たちを遠く

へ押しだしてしまつて勝手に話していることがあつた。そんなときの幸田先生の顔には言い知れぬ苦惱が宿されているようであつた。それは生徒との間に流れている苦惱ではなくて、恰かも彼自身に内在する懊惱を誰もいない個室でぶちまけてでもいるかのようでもあつた。そんな幸田先生ではあるが、一人対一人となつて話しているときはいたつて朗かで快活にとれた。文江はこれまで五六遍幸田先生に呼ばれていつて話をきいていたが、対座していると教室の講義と違つて磊落で明かるかつた。しかし、ひとたび作文が課され、提出期日がせまるころになると誰の顔もきびしい表情に変わつてしまふのである。いよいよ提出の時刻になると一斉に醜い眼差になり、それから溜息になつた。そのひそやかな深いざわめきを思い起すと、文江はたまらなくなつて、作文をばりッぱりと破りすてたくなつた。しかし文江はすぐ氣をとりなおして、最初から読みくたした。それからペンにインクを染めて次の文章にとりかかうとした。そして先刻から何度か落ちてきて、そのまま横たわつてゐる煤煙の塊りに目が停まると、ふと、その炬燵の上の死骸が、幸田先生の眉毛のような氣がしてふつと可笑しくなつた。煤煙の塊りはネズミ色の綿毛布の上に、さつと剃りおとした眉毛のようで、みればみるほど幸田先生の眉毛そのまなのである。そしてその眉と眉の下で俄かに青い透んだ目が動きだし、唇が何か話しはじめるような錯覚におびやかされそうで、いきなり文江はその煤煙の塊りを掌に載せると両手に丸めてしまつた。お蔭で掌のながが真黒に染つた。

那村文江は手を洗いに流し場に行った。流し場は暗かつた。小窓の外では風がびゅっ、びゅっ、絶えず唸っている。電柱が激しい風に慄えている。空はあくまで暗く、雪を撒ぶ低い疾い風は軒端から軒端をつたつて、母屋を押しあげるように唸っている。夕方流し場の水がめに汲んでおいた水はもう氷を張りわたしている。夜更けているので犬も啼かなかつた。文江は寒さをこらえて激しくぶつかつてくる吹雪のさまをその小窓からじつと覗いた。

どうしてこう吹き荒れるのだらう、これは確かにひとつの大きな悲しみだ。この悲しみがつもりつもって冷たい冷たい雪になるのだ。しかもこの雪が人間を窒息させ、無気力にしてしまうのだ。文江は吹き荒れる自然の暴威の前に押しまくられて手も足も出ないうずくまった姿を一瞬高山の這松にみるような気がした。あの、這松の群落も、この地上に於ける生物なのであった。彼等も生きつづけなければならぬと同じように、この吹雪の下に静かに眠っている人間たちも生きつづける必要がある。幸田先生が、A村の歳末Vという題で作文を書かせようとするのもこのことを意味するのではなかったか。那村文江はもう一度幸田先生の沈痛な表情をうかべて小窓を離れた。

——雪が降っています。力強く、無暴なまでに激しい風圧と絶間ないリズム。藁屋根ががくがくと息を切っています。その屋根屋根を猛烈な速度で飛翔する風、これは吹雪なのです。この吹雪の中でひとつひとつの生命がおののいているのです。いまにも負けてしまいそうな、じっと堪えられるだけ小さくなった肺胞を唯一のよすがとしておののいている人間なのです。そして泪の粒をうっすらと目尻に溜め、白い息を吐きながら苦しうに頬を歪めて眠っている人たち。彼等は正月のうれしさ、たのしさなど、もうどうでもよいのです。連日打ちつづくこの吹雪が早く霽れてくれればそれでよいのです。悲しく凍えてしまいそうで、やり切れないのです。それなのにこの雪は、吹雪は、このように切ない人間たちの願いを、全く知らぬもののように平然と己れの暴威をほこっています。こんな暴威のなかに、人々は何千年もよく耐えて生きつづけて来たものだと思ふと、人間の悲しみはもう尽きてしまってもいいのではないかと思われてならないのです。もう全くの夜更けで、吹雪のごお、ごおと唸りをあげる音響のほかに何もきこえません。普断ならば寢室から洩れてくる家人の寢息も今夜はなにひとつしません。もう今年あと旬日で新しい年に代わりますが、私達の村の歳末は恐らく吹雪に打ちひしがれた屋根屋

根の修理に多忙なことでありましょう。それは恰かも冷たい戦場の、荒寥たる残骸の姿に似ていると思われ
す。――

那村文江は一息に作文の結末をこう書いた。そして吻とした。しかし、文江はこの作文に心から満足を覚えたわけではなかった。文江はもっと別のことを書きたいと思った。課題は果さなければならなかったが、何故か演出者の要求する演技を稽古しているようで、その演出者の思いのままにおどる舞台人形の位置に腹が立つのである。文江の心のなかで動いているもっとも深く大きな渦巻はこの人村の歳末Vに書きつけた事柄ではないのだった。むしろ結末に書いた冷い残骸、この言葉につながって行くもうひとつ向うの叫びなのであった。この心の動きはずっと深く遠いところに発しているようだった。

那村文江は何とかして大学に進みたいと思っていた。文江のなかで大学に進みたいと願う心は、それが現実困難になればなるだけ熾烈になっていた。もうあと三月足らずで高等学校を卒業するのである。

高等学校に入学のとき、父の勘介と母のテルの意見が対立した。その果てに勘介がテルを殴りとばした。蹴飛ばした。勘介は、テルに劣らない愛情を文江に対して持っていたであろうが、そのときの勘介の気持は爆発せざるを得ないものがあつたようだ。父のどす黒く怒った顔がずっと文江の胸に灼きついている。

那村文江が大学に進みたいと願うようになったのは米代高等学校に首席で入学したときからである。高等学校に入るについても、あれほどの騒ぎが起つたのに、更に大学などと言いだしたら父母はどんな顔をするだろう。その顔を見るに忍びないばかりに大学のことはひとことも洩らさなかったのである。そしてこの念願は決して満される気遣いがないと分ってみると文江は生きる望みを喪っていくようであった。父勘介は三反百姓にすぎない。だから高等学校に入るについても、夏休み冬休みは働きにでることを約束したのであった。実際文江はその

とおりに働いてきた。父の炭焼窯にも手伝いに行ったのである。あと四五日で最後の冬休みが来るのだが、この冬休み一杯は炭出しに一里の雪道を櫛牽きに行かなければならない。しかも文江はこの労働をきらっていないことを自分自身に確かめるとき一番悲しかった。また、こうして同じあけくれを費して生きる人生の重苦しい悲しさに堪えきれない気もするのだった。文江はどうしてもこのままの状態でするずに生きて行くことが出来ない気がするのだ。幸田先生の話が、こんな文江の気持を幾分柔らげてくれることもあったが、矢張り一步学校の外にでると文江の胸はつぶれそうになる。

学校では春以来大学進学予定者のために、補習講座を開いてくれたが、文江は後髪が引かれる気持でその仲間に加わってしばらく聴講してみたものの心がみだれて途中で止したのだ。それでも諦めかねて図書館から参考書を借りうけ、皆が寝しずまってから、暗い電燈の下でコッコツとノートを取ったりしたこともあったのだ。

那村文江は、この三年間の学校生活の心の遍歴を書きつづけて幸田先生にみて貰いたいと思うのだ。父や母の疲れた蒼黒いしわだらけの顔をみただけで到底切り出せない気もするが、幸田先生ならきっと読んでくれるであろう。文江の心は次第に和らいできた。しかし幸田先生に例えみていただいたにしても、それがどうなるというのか。別の不安がのしあがってくる。幸田先生が人生の苦悩についてどんな解答を用意してしようとするのか。文江の立場を救うことにはならないのだ。こう考えてくると文江は瞬間絶望的な気持になるのだった。もう古くなって毎日おくれがちの柱時計が一時を告げていた。文江の顔はぼおっと上気して、眼が霞んできた。文江は作文を綴じ、手提鞆の中にそれを深く差し込んだ。

吹雪はなかなか止みそうになかった。明方、小止みになったが、文江が家を出るころには地吹雪がひどく、煩

の肉がむしりとられそうであった。学校までは七軒あまりあるが、文江は三年間同じ道を毎日通いとおした。夏の暑い午後など、バスに鈴なりに群がって帰る生徒たちが多かったが、文江はひとり土埃りを頭から被っててく歩いて帰った。冬はゴムの半長靴に短かくなったオーバアといういでたちであるが、その裾も忽ち地吹雪の粉でこちこちに固くなってしまふのである。しかし、文江は吹雪は恐れなかった。吹雪を恐れるようでは、とても炭背負に山に行ったり雪橇など牽けるものではなかった。胸を張って紫色に変わってくる頬にぐっと力を籠めて雪道を突っぱしるように急ぐ。学校に着くともう始業のベルが鳴りはじめていた。

幸田先生はどこにもみあたらなかった。時間割では一時間目が国語になっているが変更板には別に変わったところはなかった。とうとう一時間目は自習になってしまった。自習時間にせせと作文の仕上げをやっている人達がいた。

「まあ。助かった。桑原、桑原」

と、その目は盗むように動いている。文江はその目を憎んだ。昨夜おそくまでかかって書いた作文が、急に瀆された気がしたのである。文江はそつと作文を取りだした。そして十行ほど読みすすむと急に目舞を覚えた。一昨日までの連日の試験勉強の疲労が今になってやっと出てきたのだ、と思ひながら机にしがみつくようにして目をつむった。文江の顔はみるみる真蒼になった。頭の芯が寒かった。

「那村さんが！」

誰か叫ぶ声がして、四五人寄ってくるようすであった。吹雪の向うの燈のようであった。

文江は周囲の級友に附添われて風洞のような長い廊下をやっと歩いて衛生室に行った。衛生室に入るとき、恰度向う側の校長室から出て来た幸田先生のズボンがちらとみえた。文江が目をみはると幸田先生は厳肅な顔で、

職員室へ入って行った。文江は、幸田先生が視界から消えて去ってしまふと軀がすみずみまで凍って行くのを覚えた。何本か注射をして貰ってから真白な布団を頭から被って、その死のような冷たい布団のなかで声を立てないで泣いた。何故泣くのか自分にも分らない泪であったが、あとからあとからとめどなく泪が湧いた。

もうどのくらい時間が経ったのかわからなかった。目が覚めると軀の隅々がずきずきと刻みこまれるように痛んだ。頭をまわすことも出来ないほどまだ軀があつかった。

「熱があるんだから早引してゆっくり休むンですわね」

養護の佐山先生が布団の襟をめくって丸い白い顔をのぞかせた。その能面のような顔は少しも笑っていなかった。文江はその微笑のない顔にこっちから無理に笑ってうなずいた。相手がどんなに事務的であろうと、自分の氣持が済まない氣がした。ベットから床におりたつとまたひどい目舞がした。

「大丈夫ですか」

「ええ、大丈夫です」

佐山先生の事務的な声を背後できいて文江はやっとこれだけ答えた。屹度佐山先生は生理目とでも速断しているのかも知れない。しかし、文江はその誤った診断を咎めることは出来ない氣がした。

文江は齒を喰いしばり、胸を張って衛生室を出た。足許がもつれて柱につかまった。それからゆっくりと長い廊下を歩いて行った。もう午後の授業が終るところであった。級友たちが向うから飛んで来た。

「まだ、顔色が悪いじゃないの、もう少しがんばって衛生室勤務してればよかったのに」

「あんまり勉強して疲労困憊ってところでしょ？」

「残念。私も疲労してみたア。ところが駄目だったんだ。疲労を覚えるころには眠ってしまつてゐるんだから」

教室に入ってくるといきなりあちこちで私語がとんだ。

「すみません」

文江は、オーバーを取って来て親切に肩に載せてくれる後藤静江にやっとこれだけ言って教室を出た。作文は、学級担任の森本先生に早引理由を告げに職員室に行ったついでに、幸田先生の事務机にそっとおいた。外は相変わらず地吹雪が激しかった。青い空がちらちらとみえていたが、文江にはその青い筈の空が黄色くみえて仕方がなかった。

第二章

文江は家へ帰ってくると、這いずるようにして寝床に行った。妹の幸枝が中学校から戻ってきていたが、文江をみると、医者と呼んで来るとしきりに言った。母は今夜は不帰沢かえらざるさわの炭焼小屋に泊りになるかも知れないと言うのであった。文江はその話をきいてまた頬を濡らした。少し温まると幸枝に夕食の仕度をたのんでおいて昏昏とねむりつつけた。目が覚めてみると酷い熱になっていた。熱のために目が覚めたのかも知れなかった。口のなかがねばねばし、頭は割れるような痛みだった。九度五分あった。外は相変わらず吹雪いていて、軒端を鳴らす凍った風は、寝床のなかにまで雪を搬んでくる始末だった。

「姉ちゃ、まま、くわねえか」

「うん、熱ひどくて駄目なもの」

「医者たのんでくるンて」

「朝になったら屹度よくなってるべもの、がまんする」

文江はそう言ったものの不安でならなかった。三年間一日も学校を休んだことがないのに、若し欠席することになら残念だと思う。何故急に日舞などしたんだろう。学校で倒れて家に帰ってくるまでの今日の出来ごと、昨夜のことなど、ぐるぐる頭のなかを流れる。そして熱ばんできて苦しくなると泪がまたもやふくれあがって枕を濡らした。そして、ひょっとしたら今夜限りで死ぬのかも知れないと思う。文江はこれまであまり泣くことはなかった。だんだん分別がついて大人になってきているのだからめそめそしていられないとは思うのだが近頃ではどうしたはずみか胸が無性に苦しくなってきた、いきなりわっとなをあげて泣き伏したい衝動を覚えることがあった。しかも忽ちその自分に腹が立つのだった。そしてこのことが自分にとって哀れな物語にしかすぎないと思うとき、一層狂おしいばかりに心がたかぶった。

「姉ちゃ、泣いてるな、苦しいべな」

頭を冷やしている幸枝は文江の頬を何度も拭いてやった。幸枝が何度か診療所に行つて斎田医師を頼んで来ると腰を浮かしたが、文江は幸枝がいない間に息が止まりそうに思われて諾かなかつた。それで幸枝は十時近くまで文江の看病をつづけたが、文江が何時の間にか眠りについたので自分も冷えた寢床に入った。文江は夜中に二度ばかり夢から覚めた。軀の痛みは薄らいでいたが、熱はなかなか下らなかった。

西の烈しい風がおおとすさまじい唸りをあげて母屋にぶつかり裏の雑木林に消えて行く。梁がぎしぎしと鳴り、煤煙の塊りがひとしきりばらばらと降った。勘介にストーブをつけてくれと、いくらせがんでも金がかると言つて今年の冬もつけずにしまったのである。囲炉裡に焚火するので天井は煤煙だらけなのだ。しかもその勘介は今年の秋口からは、ストーブをつけると家が腐ると言いだした。文江は一家の経済をよく知っているの

だ。だからこれ以上強く言うこともできないのだった。

文江は今日幸田先生の机上に置いてきた作文のことも気がかりになってきた。あの作文がどんな点数になって現われることだろう。屹度いい点は貰えないだろう。あの作文には呪詛が籠っている。だからこんな熱病にとりつかれたのだ。こんなとりとめのない思いだけが文江の疲れた頭にうかんでは消えた。母のテルは遂に窯場からは戻らなかった。明方、ちろちろと真赤に燃えている窯場の火が、急にぼっと大きくなり、その火が小屋に移って勘介もテルも真黒焦になって死んだ夢をみた。文江は声をあけて泣き叫び、その声で目が覚めた。外は相変わらず吹雪いていた。一晩中、真白い糸のように戸のすき間を這い忍んだ粉雪が、ひっそりと朝の光に横たわっているばかりだった。

那村文江は三年間一日も休んだことのない学校をとうとう休んだ。

その日おそくなってからテルが山から下ってきた。文江のげっそりとやせこけた顔をみてびっくりしたテルは「どうしたってか、なンして医者に診て貰わなかった」

と、上り框にすわるなり言った。文江は起きだして炉端に横になっていた。

「姉ちゃ、何としても、諾かないもの。おら、姉ちゃ死ぬかと思っておらも死ぬような気持ちになったッけよ」幸枝が流し場から頸をつきだしてテルに答えた。文江は微笑して額に掌をあて、熱を押しはかるようにして、ほんとうにすまない顔をした。まだ熱があった。

「何ぼか、ええのか。何ともかんとも窯空けられなくて……炭焼きはこういうとき困るンてな」テルは額をしわだらけにしてほんとうに困った顔をした。テルの顔は真黒であった。昨日の朝から顔を洗って